

多様化する図書館 歴史的視点から

2018年8月20日 第27回京都図書館大会

慶應義塾大学 名誉教授

田村 俊作

自己紹介

- 研究テーマ：図書館の革新的なサービス
近年のテーマ：連携による医療健康情報サービスの展開
- 図書館情報学専攻
国立国会図書館客員調査員 1990年6月～2002年3月
メディアセンター所長兼務 2009年10月～2015年3月
- 慶應義塾幼稚舎特別書庫整理手伝い 2015年4月～

柳与志夫，田村俊作編『公共図書館の冒険』（みすず書房，2018）をめぐって

前史

- 文脈の会
- オルタナティブ図書館史研究会

図書館の現状を歴史から振り返る

- 定説～宿命論への疑問 → 歴史の見直しと、歴史事象の相対化
 - 社会・文化的観点から定説を捉え直す
 - 今まで見落とされてきたこと・語られなかったことを発掘する
- ⇒ 図書館の可能性を歴史から考える

歴史から振り返ることの意義

- 時代によるサービスの変化
 - 都道府県立図書館の役割の変化
 - BLDSCの役割の変化
 - 電子ジャーナルの登場による契約の全学化
- 起こっている事態を，背景を含めて理解する必要性

- 標準的な図書館をはみ出した「図書館的なもの」
 - 業務の外部委託・共同化(資料整理・サービス窓口)
 - 管理運営の委託
 - 武雄市図書館(集客重視, 収益も見込む)
 - まちライブラリー
 - 「ブックディレクター」による棚づくり
 - 図書館とは別のラーニングコモンズ
- 図書館の可能な守備範囲はいまよりずっと広いのでは？

資料整理の外部委託化

- 日本図書館協会の図書整理事業とその行き詰まり
- 図書館流通センターの設立
- コンピュータによる整理業務の機械化とMARCの登場
- 日本独自のシステム化 ⇒ デジタル化の遅れ？

(余談その1)アメリカ図書館協会と日本図書館協会

- 日本図書館協会
会員数 約7,000人
毎年全国図書館大会を開催
- アメリカ図書館協会
会員数 約65,000人
毎年年次大会と冬季集会を開催

公共図書館空間の変化(空間性から歴史を見る)

- 知的な雰囲気空間の活用 (1960年代まで)

受験勉強の場

本は限られた人のみが利用

この時期に起きたこと

- 図書館法 (1950年)
- 図書館の自由に関する宣言 (1954年)
- また、読書運動

- 『中小都市における公共図書館の運営』 1963（中小レポート）
 - 『市民の図書館』 1970
 - (市町村立の)中小図書館こそが身近な読書施設であり、図書館法と自由宣言の趣旨を体現した存在。中小図書館が図書館のすべて
 - 日常的な資料提供がサービスの中心
- ⇒ 「まちの図書館」モデル
- 空間性の否定からはじまる

- 居場所としての図書館（1980年代から2000年代）
 - 空間性の再発見
 - 本＋空間の活用(本を活用するための環境としての空間)

- 多様な活動の拠点としての図書館（2000年代～ ）
 - 本＋空間＋職員・関係の活用
 - さまざまな活動領域への入口・活動拠点
 - 新たな価値の創出
 - 図書館の内在的価値 ⇒ コミュニティにおける価値への視点の転換
 - ⇒ 図書館の再定義へ
- 大学図書館にも同様の動き

公共図書館における新しいサービスの方向

- 新しいサービス対象
 - 学校支援
 - こども読書活動推進

- 連携による新しいサービスの創出

「課題解決支援」

例：長崎市立図書館のがん情報サービス

紫波町図書館の農業支援サービス

- 蔵書の再定義

例：千代田図書館の内務省検閲本の発掘

(余談2)慶應義塾幼稚舎特別書庫の蔵書印調査

- 新たな蔵書の創出

例：愛荘町立愛知川図書館のまち残しカード，タヌキマップ

東松島市図書館によるICT地域の絆保存プロジェクト

東近江市立図書館によるリトルプレス出版

- 空間構成の見直し

例：武雄市図書館

まとめ

- 専門機関に対する図書館の強みと弱み

全方位の情報提供 ←→ 専門的情報の提供

利用目的を問わない。偶然の出会いの場

主題の専門知識は持てない

←→ 図書館員の売りは資料知識

- 構想力・企画力の重要性 → 職員の重要性
(一方, ルーチンワークの習熟による構想力・企画力の不足)
- 図書館が持つ資源を活かす
資料が中核, しかし,
資料だけでない。職員も空間も重要
職員の書誌的知識, 組織化の力も重要
必ずしもお金をかけたものだけではない
足りないものは連携で
- 事業の維持・拡大が課題 → 運営体制の重要性